



輸血用血液製剤の取り扱いについて

全般的注意事項

- 1 事務的な過誤による輸血事故の防止について
 - ・輸血の準備及び実施は、一回一患者ごとに行う。
 - ・輸血用血液製剤と患者の適合性を、患者名(同姓同名に注意)、血液型等で確認する。
 - ・確認時は、各チェック項目を2人で声を出して照合し、記録する。
- 2 輸血用血液製剤の外観を確認し、異常を認めた場合は使用しない。
- 3 他の薬剤との混注は避ける。
- 4 輸血時には、輸血セット等のろ過装置を具備した輸血用器具を使用する。
- 5 通常、最初の10～15分間は1分間に1mL程度で行い、その後は1分間に5mL程度の速さで輸血する(成人の場合)。
- 6 輸血開始後少なくとも約5分間はベッドサイドで患者の状態を観察し、急性反応の有無を確認する。また、約15分経過した時点で再度、患者の様子を観察する。その後も適宜観察を続ける*。
- 7 輸血副作用の発生時には直ちに輸血を中止し(血管は確保しておく)、適切な処置を行う。

*急性反応の無いことを確認した後も、発熱、蕁麻疹などのアレルギー症状がしばしば見られます。また、輸血関連急性肺障害(TRALI)、細菌感染症などでは輸血終了後に重篤な副作用を発生することがあるので、輸血中及び輸血終了後も適宜観察を続けて早期発見に努めてください。

全血製剤・赤血球製剤

貯法
2～6℃

照射赤血球液-LR「日赤」



販売名(略号)	有効期間
人全血液-LR「日赤」(WB-LR)	採血後21日間
照射人全血液-LR「日赤」(Ir-WB-LR)	
赤血球液-LR「日赤」(RBC-LR)	採血後28日間
照射赤血球液-LR「日赤」(Ir-RBC-LR)	
洗浄赤血球液-LR「日赤」(WRC-LR)	製造後48時間
照射洗浄赤血球液-LR「日赤」(Ir-WRC-LR)	
解凍赤血球液-LR「日赤」(FTRC-LR)	製造後4日間
照射解凍赤血球液-LR「日赤」(Ir-FTRC-LR)	
合成血液-LR「日赤」(BET-LR)	製造後48時間
照射合成血液-LR「日赤」(Ir-BET-LR)	

注意事項

1. 保存中の過冷(凍結)に注意する。
2. 通常の輸血では加温の必要はないが、以下の場合等は体温の低下や血圧低下、不整脈等があらわれることがあるので加温が必要となる。その際、37℃を超える加温により蛋白変性及び溶血を起こすことがあるので温度管理に注意する。
 - ・100mL/分を超える急速輸血[†]
 - ・成人の30分を超える、50mL/分以上の速度での大量輸血[†]
 - ・心肺バイパス術の復温期[†]
 - ・新生児の交換輸血[†]
 - ・20mL/kg/時を超える小児の輸血[†]
 - ・重症寒冷自己免疫性溶血性貧血患者への輸血[†]

[†] AABB Blood Transfusion Therapy: A Physician's Handbook, 13th ed, 2020

血漿製剤

貯法
-20℃以下

新鮮凍結血漿-LR「日赤」240



販売名(略号)	有効期間
新鮮凍結血漿-LR「日赤」120 (FFP-LR120)	採血後1年間
新鮮凍結血漿-LR「日赤」240 (FFP-LR240)	
新鮮凍結血漿-LR「日赤」480 (FFP-LR480)	

注意事項

1. 凍った状態では破損しやすいため、取り扱いには十分注意する。
2. 破損がないことを確認し、ビニール袋に入れた状態で30～37℃の恒温槽等にて融解し、完全に融解していることを目視及び触感等で確認し、不溶物が認められる場合は使用しない。
3. 本剤の温度が融解温度に達していない場合は、沈殿(クリオプレシビート)が析出し、フィルターの目詰まりを起こすことがある。融解時は温度管理を厳重に行い、完全に融解させる。
4. 融解後は直ちに使用する。直ちに使用できない場合は、2～6℃で保存し、融解後24時間以内に使用する。
5. 本剤を融解後2～6℃で保存した場合であっても、通常の輸血では加温の必要はない。ただし、急速大量輸血、新生児交換輸血等の場合は、体温の低下や血圧低下、不整脈等があらわれることがあるので、本剤の加温(37℃を超えない)が必要である。

血小板製剤

貯法
20～24℃(要振とう)

照射濃厚血小板-LR「日赤」



販売名(略号)	有効期間
濃厚血小板-LR「日赤」(PC-LR)	採血後4日間
照射濃厚血小板-LR「日赤」(Ir-PC-LR)	
濃厚血小板HLA-LR「日赤」(PC-HLA-LR)	
照射濃厚血小板LA-LR「日赤」(Ir-PC-HLA-LR)	製造後48時間
照射洗浄血小板-LR「日赤」(Ir-WPC-LR)	
照射洗浄血小板HLA-LR「日赤」(Ir-WPC-HLA-LR)	

注意事項

できるだけ速やかに使用する。やむを得ず保存する場合は、20～24℃で穏やかに振とうする(冷所保存はしない)。

輸血方法(輸血セットの使い方)

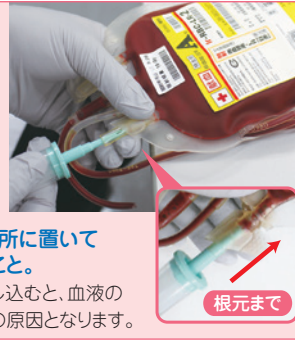
1.

外観を確認し、血液バッグを静かに左右または上下に振って内容を混和します。



4.

血液バッグの輸血口にプラスチック針を少しひねりながら、まっすぐ前進させ、根元まで十分に差し込みます。



①必ず血液バッグを平らな場所に置いてプラスチック針を差し込むこと。

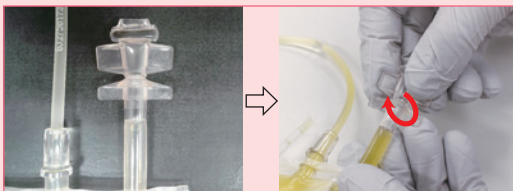
点滴スタンドに吊り下げて差し込むと、血液の漏出や針先によるバッグ破損の原因となります。

根元まで

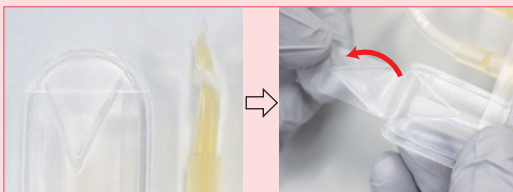
2. 輸血口の開封タイプは主に次の3種類です。



血液バッグの羽根部分をしっかり持ち、切り込み部(赤い破線部)を左右に裂き、輸血口を露出させます。



血液バッグのキャップ部分を強くねじ切り、輸血口を露出させます。



血液バッグのキャップ部分をめくり上げ、輸血口を露出させます。

3.

輸血セットのクレンメを完全に閉じてから、プラスチック針のプロテクターを外します。

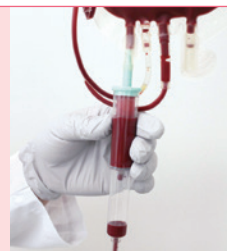


9.

静脈針のプロテクターをまっすぐ引いて外し、血管に穿刺して固定します。コネクタの場合は、既に血管に留置された留置針等に接続します。^{注)}

10.

クレンメを徐々に緩め、点滴を観察しながら速度を調節し、輸血を行います。



注) 留置針等に接続する場合は、輸血前後に生理食塩液を用いてラインをフラッシュ(リンス)して下さい。

輸血用血液製剤の使用による副作用・感染症が疑われた場合には、直ちに赤十字血液センター医薬情報担当者までご連絡ください。その際、原因究明のために、使用された製剤及び患者の検体等の提供をお願いすることがあります。なお、使用された製剤及び患者の検体は「血液製剤等に係る遡及調査ガイドライン」を参照のうえ保存してください。

輸血情報 2303-179

〈発行元〉

日本赤十字社 血液事業本部 技術部 学術情報課
〒105-0011 東京都港区芝公園1丁目2番1号
※お問い合わせは、最寄りの赤十字血液センター
医薬情報担当者へお願いします。



日本赤十字社 医薬品情報ウェブサイト

輸血セットの取り扱いに関する動画も掲載しております。
<http://www.jrc.or.jp/mr/relate/movie/>

日本赤十字社 医薬品情報 検索

スマートフォン・タブレットにも対応しています。

